

中国における日本漢学の研究

王 宝 平

はじめに

ここ十数年来、中国大陸の学界では大きな変動が起りつつある。海外の中国研究に対する未曾有の注目はそのうちの一つといえよう。たとえば、ドイツ（德国）については『德国漢学研究』（張国剛、中華書局、1994）、スウェーデン（瑞典）については『瑞典漢学史』（張静河、安徽文芸出版社、1995）、『瑞典東方学訳叢』（楊鎌主編、新疆人民出版社、1994～2000）があり、アメリカ（美国）については『当代美国「漢学」—美国現代中国学研究』（A Research on the Contemporary Chinese Studies in America、侯且岸、人民出版社、1995）、『美国中国近現代史研究』（胡大沢、中国社会科学出版社、2004）が刊行されている。また、フランス（法国）については『法国漢学研究史概論』（戴密微著、胡書経訳、北京：中国和平出版社、1996）、『法国当代中国学』（戴仁主編、耿升訳、中国社会科学出版社、1998）、『法国漢学』（第1輯～第3輯、清華大学出版社、1996～1998、第4輯～第9輯、中華書局、1999～2004、続刊中）が世に生まれている。一方、ロシア（俄羅斯）については、『俄国漢学史研究』（閻国棟、南開大学、2003）という博士学位論文があり、また、天津師範大学では2004年に「当代俄羅斯漢学研究所」まで発足した。このように、世界主要国の中国研究に対する研究成果が次々と誕生して、ブームが高まっていることがわかる。そのうち、長い中国研究の伝統を持つ日本に対する研究も盛んに行われ、注目すべき業績が上げられている。拙稿では、便宜上3つの時期に分けて中国の日本漢学の研究成果を紹介し、二松学舎大学21世紀COEプログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」の一助となることを願っている。ちなみに、今の中国で使用している「漢学」は、Sinology を指す場合もあれば、Chinese studies（中国学）を指す場合もあり、

必ずしも一致していない。むしろ「漢学」という熟語は歴史が長くて聞えがよいと思われるため、後者の意味として使用されている場合が多いであろう。拙稿ではそれに従う。

一、発足期

中国にとっては20世紀は激動そのものであった。激しい戦乱に陥り、長年の冷戦時代に巻き込まれ、さらに10年にわたる文化革命が起り、学問をするところではなかった。このような状況が終息していち早く外国の中国研究に目を向けたのは、中国社会科学院である。同情報研究所主任を務めた孫越氏は「中国学研究室」を作り、厳しい条件の中で『外国研究中国』（第1輯～第4輯、中国社会科学出版社、1979～1980）を次々刊行した。これが最初の外国の中国学の研究誌である。同氏はまた陳書梅氏とともに『国外研究中国叢書』（『俄蘇（ロシア・ソ連）中国学手冊（ハンドブック）』（2冊、中国社会科学院情報研究所編、中国社会科学出版社、1986）、『日本中国学家』（嚴紹盪、同、1980）、『美国中国学手冊』（増訂本、中国社会科学院情報研究所編、同、1993）を出した。そのうちの『日本中国学家』は1100人に上る日本人中国研究者を網羅した中国初の辞書として注目された。同情報研究所はまた、『国外研究中国問題書目索引：1977－1978』（北京図書館と共編、書目文献出版社、1981）、『国外社会科学著作提要』（経済学巻・政治学与法学巻・哲学巻・文芸学巻、中国社会科学出版社、1981）、『世界中国学家名録』（社会科学文献出版社、1994）を編集出版した。一方、同近代史研究所では『国外中国近代史研究』（第1輯～27輯、社会科学文献出版社、1980～1995）を編集し、15年にわたり海外の中国近代史研究の情報を紹介しつづけた。

これらの正式の刊行物と同時に、いくつかのあまり知られぬ「内部刊行物」でも海外に関心を寄せていた。まずは『国外中国古文化研究』（第1集～第4集、1977～？）である。北京大学中文系古文献研究室の欧米や日本の中国研究の情報を翻訳した同人誌である。ガリ版ではあるが、その後の北京大学古文献研究所に発足した国際中国学研究室の基礎作りを成し遂げる役割を果たした。次に中国社会科学院

歴史研究所主宰の『中国史通説』である。1978年よりアメリカ・フランス・オランダ・日本等で行われた中国史研究を紹介した。また、国务院古籍整理出版企画指導グループが編集した『古籍整理出版情報簡報』というニューズレターでも同様な努力を見せ、1979年第4号より嚴紹盪氏が書いた日本の『詩経』『尚書』等に関する研究動向が紹介された。とくに同誌では1981年3月に増刊号を刊行し、嚴氏の「近年来日本学者の中国古代史に関する研究」を掲載し、大きな反響を呼んだようである。

以上、20世紀70年代後半から80年代にかけて現れた成果は、研究の視線をウチからソトに向け、「文化大革命」の束縛から解放されたばかりの人々に新鮮な感覚を与えた。また、多数の基礎資料を提供し、貴重な試みをしたことは評価すべきであるが、歩み出したばかりだけに、データが古いなど未熟な点が存在したことも免れなかったであろう。とくに中国語の「情報」は諜報のニュアンスが含まれているため、上述の「中国学研究室」が情報研究所に設置されたことから、海外の中国研究を学問というよりも「情報」として把握しようとした姿勢が窺えよう。

二、発展期

20世紀80年代後半から鄧小平の推し進めた対外開放の政策のもとで、海外への関心がますます高まり、『国外中国学研究叢書』（李範文主編、青海人民出版社、第1集1986、第2集1988）、『日本学者中国文学研究叢書』（第1輯～5輯、劉柏青ほか、吉林教育出版社、1986～1990）、『当代漢学家論著叢書』（李学勤・葛兆光主編、遼寧教育出版社、1997年～2000）等が生まれた。『当代漢学家論著叢書』刊行済みの5点の著書のうちに、『道家思想与仏教』（蜂屋邦夫、雋雪艶・陳捷ほか訳、2000）が入っている。

これらの叢書のなかで影響力の強いものとしては『海外中国研究叢書』（劉東主編、江蘇人民出版社）がある。但し、1988年から今日まで70点余の中国研究書を翻訳出版した本叢書は、欧米人の著書が主で、日本人のものとしては『宋代江南經濟史研究』（斯波義信、方健・何忠礼訳、2001）が唯一の存在である。

一方、『海外漢学叢書』（王元化主編、上海古籍出版社、1989～1998）には、『通向禅学之路』（鈴木大拙、葛兆光訳、1989）、『道教』（3巻、福井康順、朱越利ほか訳、1990～1992）、『中国小説世界』（内田道夫、李慶訳、1992）、『中国的宗族与戯曲』（田仲一成、錢杭・任余白訳、1992）、『中国文章論』（佐藤一郎、趙善嘉訳、1996）、『李白詩歌抒情芸術研究』（松浦友久、劉維治訳、1996）、『中国近代白話小説研究』（小野四平、施小煒ほか訳、1997）、『柳永論稿一詞的源流与創新』（宇野直人、張海鷗・羊昭紅訳、1998）など、日本人の著書が8点収められており、のべ17点の著書のうち、半分近くを占めている。

日本人の中国研究のレベルを存分にアピールしたのは、『日本学者研究中国史論著選訳』（劉俊文主編、中華書局、1992～1993）であり、第一巻通論・第二巻專論・第三巻上古秦漢・第四巻六朝隋唐・第五巻五代宋元・第六巻明清・第七巻思想宗教・第八巻法律制度・第九巻民族交通・第十巻科学技術で、大変な好評を呼んだ。この成功を受けて、劉俊文氏はさらに『日本中青年学者論中国史』（3巻、上海古籍出版社、1995）を、上古秦漢巻・六朝隋唐巻・宋元明清巻に分けて編集出版した。

以上は叢書・シリーズの刊行物を中心に紹介したが、単行本として出版されたものには次のような成果が見られた。『日本学者論中国哲学史』（岡田武彦ほか、辛冠潔ほか編、中華書局、1986）、『气的思想：中国自然観和人的観念的發展』（小野澤精一ほか、李慶訳、上海人民出版社、1990）、『日本研究中国現当代文学論著索引1919～1989』（孫立川・王順洪編、北京大学出版社、1991）、『日本学者中国詞学論文集』（王水照・保涇佳昭・邵毅平、上海古籍出版社、1991）、『日本学者中国文章学論著選』（王水照・吳鴻春編選、吳鴻春訳、高克勤校点、上海古籍出版社、1994）である。『日本学者中国詞学論文集』には「日本詞学文献目録索引（1868～1988）」が付録されており、『日本学者中国文章学論著選』には、斎藤正謙の「拙堂文話」「拙堂続文話」、吉川幸次郎の「中国文章論」、海保元備の「漁村文話」「漁村文話続」が収録されている。また、『国際漢学論壇』（西北大学国際文化交流学院・西北大学漢学研究所編、陳学超主編、西北大学出版社、19

94)、『国際漢学著作提要』(李学勤編、江西教育出版社、1996)、『清華大学国際漢学研究所専刊』第一種)、『国際漢学漫歩』(李学勤主編、河北教育出版社、1997)、『清華大学国際漢学研究所専刊』第二種)があり、世界の中の漢学として日本漢学をとらえている。『国際漢学著作提要』には世界113名の中国研究者の著作が紹介されているが、日本人中国研究者としては計34名、つまり白鳥庫吉・内藤湖南・渡辺秀方・後藤朝太郎・桑原隲蔵・児島献吉郎・青木正児・武内義雄・小杉放庵・青木富太郎・石黒俊逸・出石誠彦・近藤春雄・貝塚茂樹・津田左右吉・吉川幸次郎・菊地三郎・加藤常賢・小尾郊一・岩村三千夫・増田渉・小川環樹・白河次郎・石田幹之助・藪内清・前野直彬・今堀誠二・大浜皓・村松暎・湯浅幸孫・加地伸行・高橋進・斯波六郎・駒田信二が入っている。また、『国際漢学漫歩』所収の外国人中国研究者16人のうち、「伊藤道治と古史研究」「大庭脩の学術の道およびその漢学研究」「山田慶児と古代針灸医学史の研究」「中村璋八の漢学研究について」「溝口雄三と中国近代思想史の研究」と5人の日本人研究者が収められている。

上記の研究と並行して、海外の漢籍も学界の注目の的とされている。浙江大学日本文化研究所では早くから中日間の書物交流に着眼し、『中国典籍在日本的流传与影响』(陸堅ほか編、1990)、『中日漢籍交流史論』(王勇編、1992)、『中国館蔵和刻本漢籍書目』(王宝平編、1995)、『日本蔵宋人文集善本鈎沉』(嚴紹璽、1996)、『中国館蔵日人漢文書目』(王宝平編、1997)、『江戸時代中国典籍流播日本之研究』(大庭脩、戚印平ほか訳、1998)、『日本見蔵中国叢書初編』(李銳清編、1999)を世に出した(以上、王勇主編『日本文化研究叢書』、杭州大学出版社、所収)。また、上海古籍出版社では、『海外珍藏善本叢書』として、『海外孤本晚明戯劇選集三種』(<ロシア>李福清・李平編、1993)、『日蔵宋本莊子音義』(陸徳明撰、黄華珍編、1996)、『日蔵古抄李嶠詠物詩注』(李嶠撰、張庭芳注、胡志昂編、1998)、『唐鈔文選集注彙存』(佚名、2000)と日本を含めた海外所蔵の漢籍の復刻を行っている。

また、日本人が漢文で書いた資料も研究の視野に入るようになった。まず、空海の『文鏡秘府論』に対する研究が多かった。人民文学出版社では最初に本書(『文鏡

秘府論』、周維徳整理、1975)を上梓し、そして1980年再版した。その後、本書は『続修四庫全書』(1694冊集部・詩文評類、上海古籍出版社、1996)や『四庫家蔵』(144冊、陳文華整理、山東画報出版社、2004)に入れて刊行された。また、本書を研究した成果としては『文鏡秘府論校注』(王利器校注、中国社会科学出版社、1983)と『空海与「文鏡秘府論」』(盧盛江、銀川：寧夏人民出版社、2005)が挙げられる。

次に、円仁の『入唐求法巡礼行記』にもいくつかの先行研究が現れた。まず、上海古籍出版社の標点本(顧承甫・何泉達点校、1986)があり、その後、小野勝年校注、白化文ほか修訂校注の『入唐求法巡礼行記校注』(石家莊：花山文芸出版社、1992)が世に生まれ、『入唐求法巡礼行記詞彙研究』(董志翹、中国社会科学出版社、2000)、『「法顯伝」与「入唐求法巡礼行記」語法比較研究』(張全真、南京大学漢語言文字学専攻博士論文、2000)といった研究が現れた。

ちなみに次の一点は2004年の成果であるが、同一内容の研究のためここに入れておく。『行歴抄注』、円珍著、白化文・李鼎霞校注、石家莊：花山文芸出版社、2004。本書は『日本入華求法僧人行記校注叢刊』の中の1点として刊行されたため、他の日本僧の書いた漢文資料も今後続刊されるはずである。

上述の書物のほかに、次のような学術誌や研究機関も雨後の竹の子のように現れてきた。日本漢学専門の学術誌・研究機関ではないものの、日本を研究視野に入れたものが多いので、記しておく。まず、研究誌を創刊時間順に列挙すれば下記のようなものがある。

(1) 『国外中国学研究』

張良春主編。瀛江出版社、1991年第1号、その後未見。

(2) 『国際漢学』

北京外国語大学海外漢学研究中心主宰、任継愈主編。1995年第1輯は商務印書館、第2輯以降は大象出版社。2005年まで第12輯。宣教師及びキリスト教史に力点を置く。第9輯より海外漢語史の研究も視野に入れるという。日本の中国学研究を扱ったものとしては次のような内容がある。研究機関の紹介に東洋文化研

究所（第1輯）、大東文化大学（第7輯）があり、漢学家コラムに内藤湖南（第8輯）のみが紹介されている。日本漢学研究コラムに「近代日本中国学形成的歴史考察」（厳紹盪、第2輯）、「日本五山文学与宋明文学的関聯和呼応」（王曉平、第3輯）、「20世紀初期日本漢学家眼中的文化中国和現實中国」（黄俊傑、第8輯）、「鄭子瑜与日本学界」（第9輯）が掲載されている。また、池田温（第1輯）、関野雄（第1輯）、小栗英一（第2輯）、木村清孝（第3輯）、直江直子（第5輯）、山田慶二（第5輯、第6輯）、高橋正（第7輯）、渡辺晴夫（第8輯）、谷川道雄（第9輯）の論文が随所翻訳されている。本雑誌が第5輯から第9輯にかけて設置した「漢学一家言」コラムには、漢学と中国学の相違に対する研究が発表されており、大変ユニークなものである。

（3）『華学』

タイ華僑崇聖大学中華文化研究院・清華大学國際漢学研究所・中山大学中華文化研究中心主宰、饒宗頤主編。1995年創刊号、1996年第2号、および2001年第5輯は中山大学出版社。1998年3輯、2000年第4輯、2003年第6輯は紫禁城出版社。第7輯まで刊行済みというが、未見。海外の中国学関係の論文が少ないが、「日本天理図書館蔵卷敦煌本『本際経』論略」（萬毅、1995年創刊号）のようにたまには見える。

（4）『漢学研究』

閻純徳主編。1996年第1集、1997年第2集、1999年第3集は中国和平出版社の出版、2000年第4集、2000年第5集、2002年第6集、2003年第7集は中華書局。日本関係のものが少なく、第6集に「日本当代楚辞研究」、第7集に「20世紀日本中国学の啓示」が見られる。

（5）『中国学研究』

復旦大学呉兆路・韓国成均館大学林俊相・福岡大学甲斐勝二主編。1997年創刊号、第3輯まで（北京）中国書籍出版社、2001年第4輯より済南出版社。2002年第5輯、2003年第6輯、2005年第7輯。創刊号所収の18点の論文の作者は、韓国人4人、日本人5人（横山裕・甲斐勝二・後藤淳一・正木佐枝子・

岡村真壽美)、残りは中国人。中国文学関係の論文が中心で、上海、とくに復旦大学の留学生が主要な執筆者らしい。

(6) 『漢学論叢』

1997年第1輯は陳仁鳳・王国安主編、漢語大詞典出版社、1999年第2輯は朱立元・陳光磊主編、復旦大学出版社、2002年第3輯は同主編、山西古籍出版社、2004年第4輯は朱立元主編、山西人民出版社。外国人に対する中国語教育に関する論文が多数を占めている。

(7) 『世界漢学』

中国芸術研究院中国文化研究所主宰。1998年創刊号、2003年第2号、2005年第3号。創刊号の目次に「漢学新視野」「日本漢学」「フランス漢学」「米国と中国」「漢学史研究」「漢学家」「人物と書評」「漢学機関」「漢学研究動態」という欄が設けられている。

(8) 『国際漢学集刊』

陝西師範大学国際漢学院・陝西師範大学漢学研究所編、陳学超主編、2004年第1輯、中国社会科学出版社。

(9) 『国際漢学論壇』

西北大学国際文化交流学院・西北大学漢学研究所編、陳学超主編。西北大学出版社より二巻(巻一、1994年、巻二、1995年)刊行された。

次に、漢学研究機関を設置時間順に箇条書しておく。

(1) 北京大学

1983年 「日本中国学」開講。

1985年 古文献研究所に国際中国学研究室設立、「sinology」修士募集。

同 嚴紹盪氏、国家新聞出版署・教育部全国高校古委会プロジェクト(2001年まで)「日本蔵漢籍善本の調査と整理」実施。『漢籍在日本流布的研究』『日本蔵宋人文集善本鈎沉』『日蔵漢籍善本書録』完成。

1987年 深圳大学文化研究所と合同で「国際中国学講習班」開設。

1994年 比較文学与比較文化研究所にて「sinology」博士募集。

1999年 北京大学「985」人文学術プロジェクト（研究代表嚴紹盪、2005年まで）「20世紀国際漢学（中国学）研究」実施。『北京大学20世紀国際中国学研究文庫』刊行。

(2) 四川外国語学院国外中国学研究所

1991年 創立。機関誌《国外中国学研究》（第1輯のみ）あり。

(3) 清華大学国際漢学研究所

1992年 創立。

2000年 人文社会科学学院思想文化研究所に統合、所長李学勤、副所長葛兆光。

(4) 北京外国語大学海外漢学研究中心

1996年 国際交流学院内に創立、現、所長張西平。

1998年 「1500—1800中西文化交流史」国際シンポジウム（中外関係史学会・浙江大学歴史系と共催）。

1999年 「海外漢学」国際シンポジウム（中外関係史学会・厦門大学・北京語言大学と共催）。

2001年 「国際二程」国際シンポジウム（5月、「国際儒学」と共催）。

「世界著名大学漢学系（所）主任（漢学家）」国際學術シンポジウム（9月）。

2003年 「西洋漢語史」国際シンポジウム（6月、北京外国語大学語言研究所と共催）。

「中国与周辺国家關係史」国際シンポジウム（7月、中外關係史学会・新疆社会科学院と共催）。

『西方早期漢学經典訳叢』『国際漢学』『国際漢学書系』刊行。

(5) 華東師範大学海外中国学研究中心

1996年 人文学院内に創立。王元化・季羨林・張仲礼・張岱年等を顧問に迎える。主任朱政惠、副主任杜公卓・忻平为（3月）。

2004年 『美国中国学史研究』（朱政惠、上海古籍出版社）刊行（8月）。

2005年 「宣教士とアメリカ早期の中国学」国際シンポジウム（5月、華東師範大学歴史系と共催）。

同 「国際視野における中国の歴史学」国際シンポジウム（10月、華東師範大学歴史系と共催）。

同 『海外中国学評論』（第一輯、上海古籍出版社、10月）刊行。

（6）北京語言大学漢学研究所

創立年不明、人文学院内に創立、所長閻純徳。機関誌『漢学研究』あり。

（7）中国社会科学院国外中国学研究中心

2004年 創立、顧問周南・李学勤、理事長汝信任、主任黄長著。

2005年「中韓人文科学振興の政策と展望」学術シンポジウム（6月、韓国人文社会研究会と共催）。

同 中国社会科学院『国外社会科学』学術誌に「国外中国学研究」コラムを設置。

三、隆盛期

今世紀に入れば、中国の経済力の増大に従い、海外の中国学に対する関心がますます強まり、止まるところを知らない勢いで発展している。具体的に次のようなことが挙げられよう。

1. 大規模な叢書の出現

海外の中国研究を扱う叢書は、前述したようにすでにあつたが、近年来、ますます拍車を掛ける勢いで発展しつつある。

まず、鄭州にある大象出版社では、2000年から『西方早期漢学經典訳叢』『当代海外漢学名著訳叢』『海外漢学研究叢書』という三つのシリーズを含めた『国際漢学研究書系』と銘打った叢書を企画し、9点刊行している。そのうち、日本の儒学を論考した『神体儒用的辨析—儒学在日本歴史的な文化命運』（王健著、2002）は、『海外漢学研究叢書』の中に入っている。

一方、中華書局では2001年から『世界漢学論叢』を華やかに企画して、日本・

アメリカ・カナダ・フランス・ドイツ・ロシアの学者の中国研究著書を16点刊行して、世間の耳目を集めている。そのうち、これまで刊行ずみの日本人の著書は下記の7点である。『李白的客寓意識及其詩思』(松浦友久、劉維治ほか訳、2001)、『西遊記的秘密』(中野美代子、王秀文ほか訳、2002)、『中国中世社会与共同体』(谷川道雄、馬彪訳、2002)、『禹城出土墨宝書法源流考』(中村不折、李徳範訳、2003)、『清水茂漢学論集』(清水茂、蔡毅訳、2003)、『中国古代帝國的形与結構—二十等爵制研究』(西嶋定生、武尚清訳、2004)。

中華書局では、さらに今年2005年から『日本中国学文萃』というシリーズを企画し、『東洋史説苑』(桑原隲蔵、錢婉約・王広生訳、2005年7月)、『中華名物考(他一種)』(青木正児、範建明訳、2005年8月)、『中国古典文化景致』(興善宏、李寅生訳、2005年8月)、『風与雲—中国詩文論集』(小川環樹、周先民訳、2005年8月)、『梁山泊—『水滸伝』108名豪傑』(佐竹靖彦、韓玉萍訳、王鏗監訳、2005年8月)、『谷崎潤一郎与東方主義—大正日本の中国幻想』(西原大輔、趙怡訳、2005年9月)を次々と出版している。

一方、南の上海古籍出版社では『域外漢学名著訳叢』と『日本宋学研究六人集』というシリーズを出版している。前者では2003年から今日まで5種が刊行されているが、日本人の著書としては『隋唐帝国形成史論』(谷川道雄、李濟滄訳、2004)、『明季党社考』(小野和子、李慶・張栄湄訳、2005)が入っている。後者には『氣与士風—唐宋古文的進程与背景』(副島一郎、王宜瑗訳、2005年10月)、『復古与創新—欧陽修散文与古文復興』(東英寿、王振宇・李莉ほか訳、同)、『科挙与詩芸—宋代文学与士人社会』(高津孝、潘世聖ほか訳、同)、『伝媒与真相—蘇軾及其周困士大夫的文学』(内山精也、朱剛他訳、同)は刊行ずみで、『新興与伝統—蘇軾詞論述』(保莉佳昭)と『距離与創造—中国詩学的唐宋転型』(浅見洋二)は2006年の刊行予定であろう。

2. 専門研究書の誕生

従来の海外の中国研究については、次に掲げた『日本中国学史』のような研究書もあるものの、翻訳が圧倒的に多かったことが事実であろう。これらの紹介の段階

を経て、中国人による専門研究も現れるようになった。次にいくつかの代表的なものを略記しておく。

(1) 『日本中国学史』第一巻、嚴紹璣著、江西人民出版社、1991。

中国初の日本中国学の歴史を整理した研究書。全文は10章から構成され、各章のタイトルは以下のとおりである。

第一章 中国文献の日本東伝の軌跡

第二章 日本漢学の事始と成立

第三章 日本漢学の流派

第四章 日本近代文化の変動と伝統漢学の終焉

第五章 欧州の「Sinology」及び日本伝来—近代日本中国学成立の条件（上）

第六章 20世紀初頭の中国文物の大発見—近代日本中国学成立の条件（下）

第七章 近代日本中国学の成立

第八章 近代日本の中国学古典研究の学術流派

第九章 現代中国文化に対する日本中国学研究者の学術貢献—戦前日本の魯迅研究

第十章 近代日本中国学の挫折

(2) 『日本漢学史』、李慶著、上海外語教育出版社。

第一巻（1867～1918）は2002、第二巻（1919～1945）と第三巻（1945～1971）は2004に刊行されたスケールの大きい著書で、明治以降の日本中国研究史をたどるもの。

(3) 『海外漢学研究』、劉正著、武漢大学出版社、2002。

第一章 現代東西各国の漢学研究—言語学を中心に

第二章 現代東西各国の漢学研究—文字学を中心に

第三章 現代東西各国の漢学研究—歴史学を中心に（上）

第四章 現代東西各国の漢学研究—歴史学を中心に（中）

第五章 現代東西各国の漢学研究—歴史学を中心に（下）

第六章 現代東西各国の漢学研究—宗教学を中心に

第七章 現代東西各国の漢学研究—思想史を中心に

(4) 『国外漢学史』、何寅・許光華主編、上海外語教育出版社、2002。

日本と関連のある内容は以下のとおりである。

上編 国外漢学の濫觴と熟成（古代～18世紀）

第一章 中国に対する周辺国家の理解と認識

第二節 中国文化に対する日本の認識と受容（飛鳥時代～五山時代）

第四章 日本江戸時代の漢学研究

中編 国外漢学の確立と発展（19世紀～20世紀初期）

第八章 明治大正時代の日本漢学

下編 伝統「漢学」から現代「中国学」へ（20世紀20年代以降）

第八章 昭和時代における日本の中国学

(5) 『域外中国学十論』、葛兆光著、復旦大学出版社、2002。

のべ10点の論文が収録された論文集であるが、溝口雄三『方法としての中国』、興膳宏・川合康三『隋書経籍志詳考』、吉川忠夫『六朝道教の研究』、吉川忠夫『唐代の宗教』、『日本学者研究中国史論著選訳』第七巻の書評、「日本的中国道教史研究印象記」を所収。

(6) 『東亜比較文学導論』、張哲俊著、北京大学出版社、2004。

以下の10章から構成されている。（かっこ内は筆者のコメント）

第一章 漢字と東亜文学（訓読）

第二章 中国文学、漢文学と母語文学の関係（漢文学との異同）

第三章 儒学と東亜文学（詩言志）

第四章 仏教と東亜文学（以心伝心など）

第五章 道教と東亜文学（三神山の伝説）

第六章 東亜古典詩歌の形式（和歌の五七調と中国）

第七章 東亜古典小説の関係（『源氏物語』）

第八章 東亜古典戯曲の形式（能楽など）

第九章 東亜文学の中の翻案

第十章 中国文学における異国（小説に描かれた日本像）

3. 次世代研究者の活躍

前述のように、北京大学では嚴紹巖教授のもとで1983年に「日本中国学」講座を設け、さらに、1985年と1994年から「sinology」（国際中国学研究）の修士コースと博士コースの大学院生をそれぞれ募集し始めた。中国の教育機関では初めてのことである。その人材育成の功を奏して、最近立派な研究成果が主に代表的な日本人中国研究者に対する研究に現れた。たとえば、内藤湖南についてはいままで『日本文化史研究』（儲元熹・卞鉄堅訳、商務印書館、1997）、『兩個日本漢学家的中国紀行』（内藤湖南・青木正児著、王青訳、光明日報出版社、1999）、『日本人眼中的近代中国』所収）、『中国史通論：内藤湖南博士中国史学著作選訳』（夏応元・劉文柱・徐世虹・鄭顛文・徐建新訳、社会科学文献出版社、2004）などの紹介があったものの、翻訳であった。本格的な研究は錢婉約氏によるもので、氏は2000年『内藤湖南研究』で北京大学比較文学与比較文化研究所で文学博士号を取得、そして、同題の学位論文は『北京大学20世紀国際中国学研究文庫』の1点として2004年に中華書局より刊行された。

また、津田左右吉についても同じである。昔から津田に関する紹介が多数にのぼり、たとえば、『儒教与現代思潮』（鄭子雅訳、上海：商務印書館、1924、1926再版、『国学小叢書』所収）がまず紹介され、続いて『儒道兩家關係論』（李繼煌訳、上海：商務印書館、1926、『国学小叢書』所収、1930、『万有文庫』所収）が翻訳されている。さらに、『渤海史考』（陳清泉訳、上海：商務印書館、1929、1930再版、1940長沙再版、『史地小叢書』所収）も版を重ねて出版されている。しかし、上述の成果は翻訳にとどまり、本格的な研究は、北京大学助教授の劉萍氏によるもので、氏は2001年に『津田左右吉研究』という題で北京大学で学位を取得し、そして、2004年に中華書局より本書が出版された（『北京大学20世紀国際中国学研究文庫』所収）。

次に吉川幸次郎である。同氏の著書は『中国文学史』（陳順智・徐少舟訳、四川人民出版社、1987）、『宋元明詩概説』（李慶ほか訳、鄭州：中州古籍出版社、1

987、1999重印）、『我的留学記』（錢婉約訳、光明日報出版社、1999、
『日本人眼中的近代中国』所収）があり、さらに『中国詩史』は安徽文芸出版社（高
橋和巳編、章培恒ほか訳、1986）、山西人民出版社（高橋和巳編、蔡靖泉ほか訳、
1989）、復旦大学出版社（高橋和巳編、章培恒ほか訳、2001）により絶えず
翻訳出版されたが、最近、ようやく張哲俊氏による『吉川幸次郎研究』（中華書局、
2004、『北京大学20世紀国際中国学研究文庫』所収）が出てきた。

さらに、徳富蘇峰の研究もあり、2003年に中国社会科学院外国哲学専攻の高
原氏が提出した学位請求論文は『明治時代の徳富蘇峰の中国観の研究』であった。

側聞するところによると、宇野哲人・青木正児・服部宇之吉（注1）の研究も進
行しており、成果の公刊が待ち遠しい。

以上の錢婉約（1997～2000）・劉萍（1996～2001）・張哲俊（1
995～1998）三氏はともに北京大学比較文学与比較文化研究所で嚴紹巖教授
に教わり、現在、それぞれ北京語言大学（錢氏）・北京大学（劉氏）・北京師範大学
（張氏）で助教授を務めて活躍している。

このように、中国の日本漢学研究は海外漢学研究と共に、20世紀70年代後半
から端緒を發し、80年代後半からの發展期を経て、21世紀に入り隆盛期を迎え、
ますます加速發展していることを紹介した。このような好調はいつまで持続發展し
ていけるのか、今後の成行を見守っていきたい。

（2005年10月31日於東京旅次）

注釈

（1）ちなみに宇野哲人・青木正児・服部宇之吉に対する中国における翻訳紹介を
記しておく。宇野哲人の著書はまず『孔子』（陳彬蘇訳、上海：商務印書館）が翻訳
され、1926年と1930年に二回出版され、また、『中国哲学概論』（王璧如訳、
南京：正中書局）も1935年と1947年に再版された。最近、彼は再び注目の
的となり、『中国文明記』（張学鋒訳、光明日報出版社、1999）が叢書『日本人
眼中的近代中国』の一点として刊行された。

青木正児も早く中国に紹介されている。『中国古代文藝思潮論』（王俊瑜訳、北

平：人文書店、1933）、『中国文学与日本文学』（梁盛志編訳、北京：国立華北編訳館、1942、『現代知識叢書』所収）の他に、上海商務印書館の『百科小叢書』に『中国文学思想史綱』（汪馥泉訳、1936）、『中国文学発凡』（郭虚中訳、1936）が収められている。また、彼の『南北戯曲源流考』（江侠庵訳、長沙：商務印書館、1938、1939再版）も版を重ねている。一方、『元人雜劇序説』（隋樹森・徐調孚訳、上海：開明書店）は1941年に刊行されてから、1957年に『元人戯劇概説』（隋樹森訳、中国戯劇出版社）と改題して再版された。また、彼の『中国近世戯曲史』（上海：北新書局、1933）は鄭震の翻訳がさきであり、次に王古魯の訳が出て、ガリ版（民国年間）があった。その後、王古魯の訳は上海商務印書館（1936）、中華書局（1954）、上海文芸聯合出版社（1956年、『中国古典文学研究叢刊』所収）、北京作家出版社（1958）から絶えず版を重ねられている。

青木の『中国文学概説』（隋樹森訳、上海：開明書店、1938、1947再版、『開明文史叢刊』所収）も1982年に重慶出版社により新版として再版。『中国文学思想史』（孟慶文訳、瀋陽：春風文芸出版社、1985）、『清代文学評論史』（楊鉄嬰訳、中国社会科学出版社、1988）、『中国文学研究訳叢』（汪馥泉訳、上海文芸出版社、1992、北新書局1930年版復刻）も翻訳されている。さらに今年に吉川幸次郎の作品とともに『对中国文化的郷愁』（戴燕・賀聖遂訳、復旦大学出版社、2005）という題で紹介された。

服部宇之吉については『儒教与現代思潮』（鄭子雅訳）が1924、1926、1934年（ともに上海：商務印書館）があった。

ちなみに倉石武四郎も中国で脚光を浴びるようになり、『岩波日中辞典』（倉石武四郎・折敷瀬興編、北京：商務印書館、1986）、『倉石武四郎中国留学記』（栄新江・朱玉麒輯注、中華書局、2002）があった。

（付記）

拙稿執筆にあたり、嚴紹盪教授の「『北京大学20世紀国際中国学研究文庫』総

序」(『吉川幸次郎研究』(張哲俊、中華書局、2004、所収)をはじめとした先行研究を参考にした。記して感謝の意を表したい。